

氏名	高山 亨太
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 70 号
学位記授与の日付	2019 年 9 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	ろう者学の知見を反映したソーシャルワーク教育に関する 基礎研究
論文審査委員	審査委員長 齊藤 くるみ 審査委員 金子 恵美 審査委員 金子 能宏 審査委員 木村 容子 審査委員 田村 真広

**題目：** ろう者学の知見を反映したソーシャルワーク教育に関する基礎研究  
**Incorporating Deaf Studies' Experience into Social Work Education**

**氏名：** 高山 亨太 Kota Takayama

**要旨：**

本論文の目的は、ろう者に関わるソーシャルワーク実践に寄与し得るソーシャルワーク教育について理論的に考察することである。ろう者は、日本手話を言語とし、かつ、ろう文化を持つ文化言語マイノリティであるが、ソーシャルワークの社会的文脈においては、伝統的に医学モデルに基づいて、治療やリハビリテーションが必要な聴覚障害者として語られてきた。つまり、ろう者は、長らく、そして現在も口話や聴覚活用を余儀なくされ、聴コミュニティへの適応に主眼を置いたソーシャルワーク実践による不利益を被っている。このような現状の中、ろうコミュニティより、医学モデルに基づいたソーシャルワークに対する苦情申し立てがなされたのである。医学モデルによって形成された言説やスティグマに抵抗するために、黒人学や女性学の知見を得て、ろう者の視座や経験知が集合体化したのが「ろう者学」なのである。

社会正義の観点から、ろう者を対象にしたソーシャルワーク実践においては、医学モデルではなく、ろう者学から派生した文化言語モデルの視座に立ったろう者のリアリティの理解が重要なのである。欧米で発展したろう者学のカリキュラム及びギャローデット大学ソーシャルワーク学部が全米ソーシャルワーク教育連盟に提出した歴代のカリキュラム報告書を分析した結果、ろう者やろうコミュニティに関する最新の知見や主流理論群を取り入れた「ろう文化ソーシャルワーク」とその教育プログラムが重要であることを示した。

研究結果から得た知見を基に、日本におけるろう文化ソーシャルワークに寄与する養成カリキュラム及びシラバスの試案をまとめ、「ろう文化ソーシャルワーク」の構成要素について試論を提示した。今後の日本におけるソーシャルワーク教育カリキュラム基準に「ろう文化」を位置付けるための基礎資料とその社会的意義を結論として示した。

**【Abstract】**

**Incorporating Deaf Studies' Experience into Social Work Education**

Kota Takayama

The purpose of this dissertation is to develop an educational curriculum to teach the content of deaf studies to both Deaf and hearing social work students, along with professional social workers in Japan. Since the deaf community is relatively small, social workers may be ill equipped to understand and work with this unique minority population and may not receive proper training on deaf culture. Deaf people have difficulty finding social work services that are linguistically and culturally accessible to them. They also tend not to receive appropriate services through conversation in their primary language and environment.

This research focuses on improving the cultural and linguistical practice competencies for those social workers who are serving to deaf communities. This research also seeks to provide the field of social work with a curriculum model. According to the medical model, Deaf deviated from what is normal and hearing culture. Historically, medical model of the deaf tends to treat Deaf people as problems to be solved, often failing to take into account the diverse aspects related to the lives of Deaf people. Based on the theoretical and systematic literature review, traditional social work practice and social work education described deaf people as a disabled people associated with medical model of the deaf even though Deaf people identified themselves as a cultural and linguistical minority. Deaf studies is an academic discipline focused on the lives of Deaf people and that is the key to social work practice in deaf communities. Social workers must be trained to understand deaf perspectives and cultural norms through the deaf studies curriculum.

Gallaudet University initiated undergraduate social work education in 1970 and master's program in social work in 1989. The goal was to increase professional opportunities for Deaf students and to provide Deaf people with the cultural and linguistical model social work services they do not ordinarily receive. With a few educational resources and about deaf culture geared towards social workers, however, there is no sufficient resources and curriculum for social workers to develop the cultural competency necessary to provide the best services and practices due to the medical model. Therefore, it is important to understand deaf studies experience in order to assess social work education curriculum in Japan.

An analysis of the self-study reports prepared by Gallaudet University

Department of Social Work for Council on Social Work Education's accreditation suggests that social workers should receive a training to understand knowledge and skills regarding deaf culture perspectives: deaf history, oppression, hearing privilege, boundary issues, cultural and linguistic approach, and cultural resource, to name a few.

In Japan, also, Japan College of Social Work operates Syuwa-ni-yoru-Kyoyo-Daigaku (Liberal Art Program for Deaf and Hard of Hearing), and one of the classes offers the introduction of social work practice working with deaf communities. The targeted class participants are deaf social work majors, deaf social workers, sign language interpreters, and hearing students.

Finally, the education curriculum and syllabus: Introduction to Social Work Practice with Deaf and Introduction to Deaf Studies at Japan College of Social Work are drafted to gain the social work education outcome towards serving deaf populations. There is a need for more curriculum research that focuses specifically on Deaf social workers' narratives and experiences based on their clinical experiences. It would be beneficial to investigate which factors lead to more positive education outcomes for deaf communities. There is also a need to determine what kinds of training and competencies to social workers about deaf culture in the social work education system in Japan are the most effective in building cultural competencies working Deaf communities.

## 【審査結果の要旨】

### 1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	齊藤	くるみ	手話言語学、脳神経言語学、障害学、コミュニケーション論
審査委員	金子	恵美	地域における子ども家庭支援、保育と家庭支援
審査委員	金子	能宏	社会保障政策、社会保障の経済分析と国際比較
審査委員	木村	容子	子ども家庭福祉
審査委員	田村	真広	学校カリキュラムの歴史と理論、福祉教育論

2019年5月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、6月15日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、2019年7月26日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行った。その結果、5名の審査委員全員が合格とし、審査委員会において第3次予備審査の合格が了承された。次いで、9月4日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。それを踏まえ、審査委員5名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2019年9月12日の社会福祉学研究科委員会にて審査結果が提案され、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2019年9月26日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

### 2 博士論文の評価

本論文は、筆者の研究課題を科学的に追求する自立した研究能力、社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度の実践的研究能力、そして社会福祉学の豊かな学識を示すものである。以下に詳細を述べる。

本論文の研究目的は（1）既存の理論に基づきソーシャルワーク教育にろう者学の視点が不可欠であることを示すこと、（2）ろう者の取り扱いの現状と課題を明らかにし、その改善を目指すこと、ろう者学の拠点であるギャロデット大学のソーシャルワーク教育の展開から重要な要素を取り出すこと、そして日本におけるその応用可能性と実践例を示すことであり、最終章の教材開発・教授法開発の提示も含め、最終的な目標の「ろう者がより良いソーシャルワーク実践の恩恵を享受すること」に貢献する教科書の役割を果たす論文である。

研究方法として、先行研究を網羅的に読み込み、ソーシャルワークにおけるろう者学の意義を社会構成主義に立つソーシャルワーク理論に言語文化モデルを適用することで示し、次にアメリカのろう者の総合大学であるギャロデット大学のカリキュラムの変遷・展開及び日本のろう者相談

員・聴覚障害ソーシャルワーカーの研修の変遷・展開について歴史的視点で文献研究を行い、的確な図式化をすることで示している。それらを基礎として、さらに教材・教授法開発を含む自身のソーシャルワーク教育実践を示しており、適切な論述の展開がみられる。以上のような方法論であることから、倫理的問題はない。

医学モデルのろう者“deaf”から言語文化モデルの“Deaf”へのパラダイム転換に依拠した理論構築をした論文はおそらく日本にはまだなく、新規性・オリジナリティがある。

特に評価すべき点は、ろう者という特殊な言語文化集団をテーマとし、マイノリティーの人権と尊厳を守るためのソーシャルワークの重要性と、ソーシャルワーク教育の進化・進展を論じたこと、その過程でアメリカの黒人学などにも言及し、弱者や被差別集団に寄りそうべきソーシャルワークの普遍的課題に向き合っていることである。結果として、ソーシャルワークの真髄にせまる汎用性の高い理論および教授法を提示することができている。

また障害者の権利条約で、障害者は文化的同一性の承認と支持を受ける権利を有することが謳われたが、日本のソーシャルワークにはそのことは未だ十分反映されていないことを考えると、極めて先駆的研究である。

日米比較研究によって日本のカリキュラムを相対化した批判性、他分野への研究の貢献性を示した学際性、自らろう者としてソーシャルワークの実践に携わり、ろうの意味世界を論じた当事者性も評価できる。またコーダ（children of Deaf adults）については健常者とされるために社会的支援ニーズがみとめられていないが、文化言語モデルにおいてはマイノリティであり、特有の生きづらさを抱えていること、そしてろうコミュニティの形成において重要な位置づけにあることを示したのも日本の社会福祉分野ではおそらく初めてと思われる。

社会構成主義に立つソーシャルワーク理論に言語文化モデルを適用するという理論研究と、アメリカのろう者学を基盤としたソーシャルワーク教育および日本のろう者相談員・聴覚障害ソーシャルワーカー協会の研修の歴史にそった文献研究により、ろう者学を基盤としたソーシャルワーク教育の重要性を示した上で、世界で唯一のろう者の総合大学ギャロデット大学でソーシャルワーク教育に携わった経験・知見を活かし、日本の大学でも教えながら自ら開発した教材・教授法を開発した実践研究に発展していることも評価する。

本提案の検証および改善も含め、今後の研究の発展を期待する。

本論文のろう文化ソーシャルワーク養成カリキュラムの提案を受け、関係学会や業界において、今までのカリキュラムが真摯な検討に付されることを期待する。

### 3 最終試験の結果

公開口述試験および論文を審査した結果、審査員5人一致して博士号を授与するにふさわしいと判断した。